

使徒行伝における西方型本文の研究

杉山 世民

新約聖書の「西方型テキスト」と言っても、そのような型の写本が、そのままそっくり現存しているというのではない。およそ5000から成る新約聖書本文に関する写本やその他の証言を、いわゆる本文批評学者と言われる人たちが、かなり科学的に比較検討した結果、得られた一つの特色と傾向を持った「読み」のことを言う。とは言え、西方型の読みを代表する大文字写本は、5世紀あるいは6世紀に属すると言われる「D（ベザ）写本」である。この写本は、世界聖書教会連盟（United Bible Societies）の分類では、「05」で福音書と使徒行伝とを含んでおり、別名ベザ・カンタブリギエンシス（Bezae Cantabrigiensis）で知られている。

「西方型（Western）」という名称は、最初ドイツの新約学者グリースバッハ（Johan Jacob Griesbach 1745~1812）によって「西方グループ」という名称で用いられ、後にウェストコットとホート（Westcott & Hort W. 1825~1901、H. 1828~1892）によっても用いられた。しかし、ベザ写本に認められるギリシア語とラテン語との対訳では、ギリシア語の方は、かなり崩れていると言われ、起源が西方、つまりローマと考えられて「西方型」と呼ばれたが、この呼び名には全く問題が無いわけではない。なぜなら、ラテン語本文がギリシア語本文に影響を与えたのか、あるいはギリシア語本文がラテン語本文に影響を与えたのか明瞭にされていないからである。実際、ロープス（J.H. Ropes）は、西方型テキストの起源を使徒行伝の「私達部分（we-section）」と関連付けてシリアのアンテオケではないかと推測している。（"The Acts Of The Apostles," THE BEGINNINGS OF THE CHRISTIANITY. Vol. III p.cclv.）

ロープスの場合は、明らかに西方型テキストの作者を使徒行伝の著者、あるいはパウロの同行者と結びつけているところが興味深い。明瞭な確証がない限り断言できないのであるが、医者ルカが西方型テキストと新約聖書編集に何らかの関わりがあるのではないかという印象を私自身も持っている。このことを、かつて恩師 L. A. フォスター先生 (Dr. Lewis A. Foster) に尋ねたことがあるが「証拠がない」と言っておられたのを思い出す。フォスター先生もハーバードで学ばれたのでロープスの影響が感ぜられる。

それでは、使徒行伝の西方型テキストが具体的にどのような特徴や性格を持っているのかを見てみよう。B. M. メッツガー (Bruce M. Metzger, *A Textual Commentary*, UBS 1971) によると、1881年ウェストコットとホートの発表した使徒行伝ギリシア語本文 (シナイ、バチカン写本偏重) は、後に1914年 A. C. クラークが、”The Primitive Text of the Gospels and Acts”というテーマでベザ写本だけを用いて使徒行伝ギリシア語本文を発表したその使徒行伝本文に比べると、WHの本文が18,401語を数えるのに対して、クラークのそれは、19,983語にのぼり、1,582語多い。これは8.5%増えていることを意味している。しかし、このクラークの使徒行伝本文は、「短い読みが、長い読みより優先されるべきである」という本文批評の基本原則に反しており、多くの学者 (サンディ、スーター、ケニヨン等) に批判された。

1. 使徒行伝に見られる西方型テキストとその特徴

西方型テキスト、特にベザ写本の特徴は、使徒行伝の本文に豊富に観察され得る。使徒行伝に見られるこの約10%の西方型加筆は、どのような理由によるのだろうか。一昔前、よく引き合いに出されたのがギリシア語文法書で良く知られたドイツ、ハレ大学教授のF. ブラース (Friedrich Wilhelm Blass 1843~1907) の福音書と使徒行伝の二つの版が存在したと推定する説である。ブラース (F. Blass, “Philology of the Gospels” 1898 pp.102~105) によると、ルカは福音書と使徒行伝を二つの版に分けて書いたというのである。ルカはパレスチナのカイザリヤから、近くに住んでいたローマ政府の高官であったと思われるテオピロに対して第一版の福音書を書き、後にローマへ行ってから、今度は、地方の教会の用途の為に第二版の福音書を書いたのだが、この時はテオピロに対して書いた内容の内、不要と思われるものを削除して書き送った。同様に、使徒行伝をルカはまず、第一版をローマ人のために書いた。ブラースによると、この時には

多くの加筆が見られたが（この「草稿」が使徒行伝の西方型本文）、テオピロへ書き送ったときには不必要な加筆の部分を削除して本文を短くして書き送った（この「完成稿」がWHの本文）と言うのである。

この学説は、もともとブラースの前にスイスのプロテスタントで、アルミニウス派の神学者ジャン・ルクレール（Jean Leclerc 1657~1736）によって唱えられていたものであるが、ブラースの説は、これよりももっと丹精に組み立てられていた。このブラースの説は、最初はサーモン、ツァーンやネストレなどの共鳴を得たが、やがて原著者ルカが二つの版を書いたという「二版説」は認められなくなっていった。

使徒行伝に見られる西方型の加筆は、有名な小アジアの地理歴史の権威 W. ラムゼイ（Sir William M. Ramsay 1851~1939）によれば、かなり蓋然性が高いという。例えば、20 : 15において、私達の本文では *κακεῖθεν ἀποπλεύσαντες τῆ ἐπιούσῃ κατηντήσαμεν ἄντικρυς Χίου, τῆ δὲ ἐτέρα παρεβάλομεν εἰς Σάμον, τῆ δὲ ἐχομένη ἤλθομεν εἰς Μίλητον*。「**そこから出帆して、翌日キヨスの沖合にいたり、次の日にサモスに寄り、その翌日ミレトに着いた。**」（日本聖書協会口語訳）となっているが、ベザ写本には、「**サモスに寄り**」の後に *καὶ μείναντες ἐν Τρωγυλ(λ)ίῳ*「**トログリオンに停泊し**」という加筆が見られる。ラムゼイによれば、ミレトに入る前にサモス島の向かいに突き出たトログリウム（トログリオン）の岬に、海が穏やかになるのを待つ理由で寄港し、それからミレトへと行くことは、おおいに考えられると言う。

他にもたとえば、27 : 5では、ほとんどの写本が、私達の手になっている本文のように *κατήλθομεν εἰς Μύρα τῆς Λυκίας*「**ルキヤのミラに入港した。**」（日本聖書協会口語訳）となっているが、小文字写本である614やヴルガタ訳、古代ラテン語訳、シリア誤訳などの西方型加筆は、ここに（*κατήλθομεν* の前に）*δι' ἡμερῶν δεκαπέντε*「**15日間ミラに寄港した**」という風に具体的に「15日間」という言葉を加えている。このように使徒行伝に見る西方型の加筆は、まるでパウロと一緒に、そこにいるかのように具体的な、しかも現場をよく知っていなければ書けないような加筆が多い。

地理的なことだけではなく、状況の描写についても同様に言うことができる。

例えば、19 : 9には、パウロがエペソにあったツラノという人物の講堂で毎日論じたことが記されている。ἐν τῇ σχολῇ Τυράννου の後に続けて、ベザ写本には τινὸς ἀπὸ ὥρας πέμπτης ἕως δεκάτης **「第5時くらいから第10時まで」** という風に具体的な時間を書き加えている。これは午前11時くらいから午後4時までを意味し、恐らくツラノが地中海世界の習慣としてあった「シエスタ（午睡）」の時間には講義をしないので、パウロはその時間に講堂を借りて福音を語り続けたものと思われる。西方型の加筆者は、その消息をよく知っていたのであろう。

もう一つ興味深い箇所は、12 : 10にペテロが御使いに導かれて牢獄を脱出する場面がある。καὶ ἐξελθόντες προῆλθον ῥύμην μίαν **「そこを出て一つの通路に進んだとたんに」**（日本聖書協会口語訳）という箇所、ベザ写本には ἐξελθόντες κατέβησαν τοὺς ἑπτὰ βαθμοὺς という加筆が見られ、**「そこを出て七つの階段を降りて、一つの通路に進んだとたんに」** という風に、エルサレムに関する詳しい細かい知識を持っていることがよく分かる。

2. 使徒行伝に見る西方型テキストの神学的傾向

次に、西方型の読みは神学的に一つの傾向を持っていることが分かる。これについては、1966年にケンブリッジ大学出版会から出された E. J. エップの論文が優れている（Eldon J. Epp, “The Theological Tendency of Codex Cantabrigiensis in Acts” Cambridge University Press, 1966）。彼の結論は、使徒行伝に観察し得る西方型テキストの神学的傾向は「反ユダヤ的(anti-Judaic)」と言う。エップの言葉によれば “Codex Bezae in Acts shows a decidedly heightened anti-Judaic attitude and sentiment.” と言う。エップが注意深く言うように、決して “anti-Jewish” すなわち、ユダヤ人という人格に対する anti-Semitism ではなく、宗教体系としてのユダヤ教に対するという意味で、敢えて “anti-Judaic” と呼ぶものらしい。結論を先に紹介しておいて具体的な例を見るのは、順序が逆かもしれないが検証してみよう。エップは、ベザ写本が反ユダヤ教的性格を表していると、いろんな学者が考える箇所を紹介している。

Peter Corssen (1896年) : 14 : 5、14 : 19、17 : 12、18 : 4、19 : 9、23 : 24、24 : 5、そして、多分 2 : 37、4 : 31。

J. H. Ropes (1926年): 14 : 5、24 : 5、2 : 17、2 : 47、18 : 4、
 そして、恐らく20 : 21、16 : 15。
 Lagrange (1935年): 2 : 17、2 : 39、2 : 47、4 : 9、4 : 12、
 6 : 1、13 : 45、13 : 50、14 : 2、
 18 : 12~13、15 : 20、29。
 P. H. Menoud (1951年): 3 : 17、4 : 9、4 : 14、5 : 38、5 : 39、6 :
 11、13 : 45、14 : 2~7、18 : 12~13。

ここに挙げられた箇所から、いくつか見てみよう。例えば、2 : 47に見えるベザ写本(D)の言葉の意図的改変の中には、興味深い神学的な特徴を推測することが出来ると言う。バチカン写本(B)と比較対照してみる。

『神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。』(2:47 日本聖書協会口語訳)

B (バチカン写本)	D (ベザ写本)
... αἰνοῦντες τὸν θεὸν καὶ ἔχοντες χάριν πρὸς ὅλον τὸν <u>λαόν</u> αἰνοῦντες τὸν θεὸν καὶ ἔχοντες χάριν πρὸς ὅλον τὸν <u>κόσμον</u> .

バチカン写本では「すべての人々に・・・」が、πρὸς ὅλον τὸν λαόν (国民) となっているが、ベザ写本では πρὸς ὅλον τὸν κόσμον (世界) となっている。前者の λαόν は、15 : 14 と 18 : 10 の二か所を除いては、いつも「ユダヤ人」の意味で用いられていると言う。もちろん、この時にD写本の筆者家が目の前にB写本を持っていて意図的に λαόν から κόσμον に改変したのかどうか確証はないが、しかし、D写本の筆者家は、ユダヤ人の国民だけに好意を得ているのではなく、クリスチャンは全世界の人々に好意を持たれていることを言おうとしているらしい。このように、この異読には「普遍主義」と「反ユダヤ主義」が意図されているとエップは言う。

もう一つ興味深い箇所は、18 : 4である。これも比較検討してみよう。

『(パウロは)安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシヤ人の説得に努めた。』(18:4 日本聖書協会口語訳)

B (バチカン写本)

διελέγετο δὲ ἐν τῇ συναγωγῇ κατὰ
πάν σαββατον ἔπειθεν τε Ἰουδαίους
καὶ Ἑλληνας.

D (ベザ写本)

εἰσπορευόμενος δὲ εἰς τὴν συναγωγὴν
κατὰ πᾶν σαββατον διελέγετο, καὶ
ἐντιθεὶς τὸ ὄνομα τοῦ κυρίου Ἰησοῦ,
καὶ ἔπειθεν δὲ οὐ μόνον Ἰουδαίους
ἀλλὰ καὶ Ἑλληνας

アテネからコリントへ行ったパウロは、天幕造りが職業であったアクラとプリスキラに出会い、一緒に仕事をしながらシナゴグで伝道していた。私達が手にしている本文は、B写本である。「安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシヤ人の説得に努めた。」とあるところ、D写本には、上記ゴシック体に下線を引いたような改変、あるいは加筆が認められる。ベザ写本の本文をそのまま訳すと、

『(パウロは) 安息日ごとに会堂に入り、語り続け、主イエスの名を植え付けながら、ユダヤ人だけでなくギリシヤ人をも説得し続けた。』となる。ゴシック体に下線の部分がベザ写本独特の読みである。ここにもベザ写本の筆者家が、ユダヤ人よりギリシヤ人の方に強調点を置こうとする意図が働いているのを観察することが出来る。

反ユダヤ教的傾向を示すベザ写本の読みの例として、最後に15:20, 29を挙げる。エップは、この箇所には触れないが、やはり、ここにも西方型テキストの神学的傾向を読み取ることが出来るのではないかと思われる。

『ただ、偶像に供えて汚れた物と、不品行と、絞め殺したものと、血とを、避けるようにと、彼らに書き送ることにしたい。』(15:20 日本聖書協会口語訳)

この箇所は割礼問題によって引き起こされたエルサレム会議における決定事項が取り上げられているところであり、他に21:25にも見られる。割礼は、不要である代わりに「偶像に供えたもの (τῶν ἀλισγημάτων τῶν εἰδώλων)」や「不品行 (πορνείας)」 「絞め殺したもの (τοῦ πνικτοῦ)」 それに「血 (τοῦ αἵματος)」を避けるようにとの決議が出された。21:25から、これは、特に異邦人に課せられた要求事項であつたらしい。

ベザ写本では、上記の四つの要求のうち「絞め殺したもの (τοῦ πνικτοῦ)」が

削除され、「血 (τοῦ αἵματος)」の後に、いわゆる「否定的黄金律 (自分にして欲しくないことを人にするな καὶ ὅσα μὴ θέλουσιν ἑαυτοῖς γίνεσθαι ἑτέροις μὴ ποιεῖτε)」が加筆されている。15 : 29にも、この加筆が見られる。ただ、この節の終わりの部分は、πράξατε φερόμενοι ἐν τῷ ἁγίῳ πνεύματι 「聖霊によって支えられて」という加筆がなされている。しかし、21 : 25には「否定的黄金律 (negative golden rule)」は見られないが、「絞め殺したもの」は削除されている。K. Lake によれば、P⁴⁵ とオリゲネスはこの四つのうち「不品行」を削除している。

総合的な本文の現象から、次のような解釈上の問題が発生する。つまり；

- (A) 異邦人たちは「偶像に供えたもの」「不品行」「絞め殺したもの」「血」という四つの禁止条項を課せられたのか、それとも、西方型テキストが示すように、「絞め殺したもの」あるいは「不品行」を除く二つ、そして「否定的黄金律」なのか。
- (B) これら三つ、あるいは四つの禁止条項は、純粹に儀式的なものなのか、あるいは、倫理的なものなのか、それとも両方なのか。

ベントレーは、この「禁止条項」は、偶像に供えられた豚肉や、絞め殺されたものや血などの宗教的不浄を意味するのではないかと想像する。あるいは「不品行 (πορνεία)」は、πορκεία (pork?) の筆耕の誤りではないかと言う者もいるが、メッツガーによれば、そのようなギリシア語は全く存在しないと言う。実際、「豚」を意味する言葉なら、ルカが「放蕩息子」の譬えに使った χοῖρος (ルカ 15:16) を使ったであろうし、レビ記 11:6,7 に見られる LXX のギリシア語にも、この言葉が使われている。我々が、想像する以上に写本の筆写という作業は、単なる機械的な作業ではなく、筆耕の主観的判断や神学的傾向が侵入する可能性が高いことが分かる。使徒行伝における西方型テキストの読みは、概して反ユダヤ教的であると言えるのかもしれないが、その加筆は、ふつう、改悪とされる。

3. 西方型テキストの功罪

使徒行伝における西方型テキストの改変された、あるいは、加筆された「読み」は、信憑性があるのかどうか大きな問題である。この問いに対して図式

的な解答を与えることは難しい。昔から、西方型の読みは、他の写本に見られない異端的なものであるという烙印を押されて理解されて来た。しかし、エップが言うように使徒行伝における豊富な、約10%も長い西方型のさまざまな加筆は、これもまた新約聖書本文のもう一つの「伝承」なのであって価値が高いのである。しかも、かなり初期の教父たちの引用にも見られるところから、単に年代的にかなり初期にまでさかのぼるだけでなく、西方型テキストの筆耕には、ストーリーをより躍動的（ドラマチック）に、あるいは、明瞭に描こうとする意図が働いていて、かなり自由に書き加えている。

例えば、使徒行伝8：24には魔術師シモンが、ペテロが手を置くと聖霊が降るのを見て、その力を羨ましく思い、お金でその力を買おうとするところがある。（英語の *simony* の由来であるが...）ペテロは、この男に『おまえの金は、おまえもろとも、うせてしまえ。神の賜物が、金で得られるなどと思っているのか。』（日本聖書協会 口語訳）と語り彼を責めるが、これを聞いたこの魔術師は、あわてて『仰せのような事が、わたしの身に起らないように、どうぞ、わたしのために主に祈って下さい。』（同上）とペテロに懇願するのだが、ベザ写本では、この後に続いて魔術師シモンの様子をこのように描き出している。『...彼はさめざめと泣くのをやめなかった (*ὄς πολλά κλαίων οὐ διελίμπανεν*)』これは、メツガーが言うように使徒の権威を強調しようとする意図なのかもしれないが、大いに有り得るように思われてならない。このような加筆の故に西方型テキストは否定されていくことになる。

1世紀、あるいは、2世紀には、まだ「新約聖書」という「権威の書」としての教義的概念が確立されておらず、かなり自由に加筆がなされたのかもしれない。カルヴィンの友人でもあったベザは、写本D（ベザ写本）を手を持っていたが、他の写本と「読み」が随分異なっていたので、自分のギリシア語聖書の編集のために使うのを躊躇したと言う。このように西方型テキストは、「大多数（majority）の読み」という点から見れば不利であるが、しかし、新約聖書本文の確定に、一つの大きなチャレンジを与えるという別の意味で価値ある貢献をしているとも言える。

4. 結語

新約聖書本文研究における西方型テキストの存在は、本文伝承の一つであっ

て、新約聖書本文の確定という困難な作業に対して、一つの価値ある貢献をしていると言うことが出来る。勿論、「西方型テキスト」と言っても、そのような一つの写本がある訳ではなく、「レギオン」ほどある様々な写本の中に「散在」しているのを忘れてはならない。ベザ写本は、その代表に過ぎない。メッツガーは「**西方型テキストの中には、明らかに他の型にはないオリジナルの読みが存在する**」(E.F. Flack & B.M. Metzger, *The Text, Canon, and Principal Version of the Bible*, p.13) とする。C. R. グレゴリーは、西方型テキストは、単なる本文伝承のひとつではなく「**オリジナルの加筆版**」であって、これに変更がなされていない部分は、多くの場合オリジナルである、とまで言及している。(C.R. Gregory, *Canon and Text of the New Testament*, 1907. P.489)

この西方型テキストの存在に、誰が深く関与しているのか、歴史は沈黙している。ただ、言えることは、私達の手元には新約聖書の豊富な証言が残されていて、神の言葉を豊かに学ぶことが出来るということである。これは、個人的に言えば、歴史の主が救いの経綸の一端として、不思議な形で聖書を導いておられるという信仰的認識を裏付けているのではないかと考えざるを得ない。

The particular Western-text readings of the Book of Acts

Seimin SUGIYAMA

The aim of this essay is to introduce some of the typical Western-text variant readings of the Book of Acts in the New Testament. The Western Text is usually regarded as corrupted, paraphrased, having a lot of interpolations, as shown in my previous essay of ΠΡΟΠΥΛΑΙΑ 4 1992.

In 1914 A. C. Clark, Corpus Professor of Latin in the University of Oxford, published the Greek text of the Book of Acts, which was established only by the Western-text. He challenged one of the important axioms of textual criticism that is brevior lectior potior (“The shorter readings should be preceded.”). Consequently his text of the Book of Acts is 8.5% longer than that of Westcott & Hort’s. The text of WH has 18,401 words, whereas A. C. Clark has 19,983 words.

Some of the Western variant readings in the Book of Acts introduced in this essay, such as 12:10, 19:9, 20:15, 27:5 are evaluated as valid by W. Ramsay and thinks someone who traveled with Paul added precise circumstances.

Admitting that there is some doubt on these Western additions and alterations of the text of the Book of Acts, these variant readings found in the Western Text are also another important tradition of the New Testament text.